

早期の乳がんを切らずに治す 保険適用で注目 の「ラジオ波焼灼療法」、長所と短所

がん治療は、手術でがんの病巣と周囲のリンパ節を完全に切除するのが基本です。

昨年、早期の乳がんを切らないで治す「ラジオ波焼灼（しょうしゃく）療法」が、条件付きで保険承認されました。

ラジオ波焼灼療法は、肝がんや腎がん、肺がんに対し、いくつかの条件の下、治療オプションの一つになっています。ラジオ波焼灼療法は、どんな治療で、どのようなメリットや副作用があるのでしょうか。

ラジオ波焼灼療法で使うラジオ波は、電子レンジなどで使うマイクロ波や AM ラジオの電波と同じ電磁波の一種です。

肝がんでも、乳がんでもがん病巣に細い針の電極を刺し、その針に通電してエネルギーの高いラジオ波を出して治療します。人の体もがん細胞もラジオ波や電磁波は通しにくく、針電極から出たラジオ波のエネルギーはすぐに熱に変わります。この熱で針を中心に直径約3センチ（半径1.5センチ）の組織が焼却されます。

乳がんは女性で最も多いがんで、日本人女性のおよそ8人に1人が経験します。幸い早期に見つかる場合が多く、転移のない大きさ2センチ以下のI期の患者が約半数です。

■ 適応は1.5 cm以下の早期がん

実際にラジオ波焼灼療法はどうするのか、体表に近い早期の乳がんを例にみてみましょう。

まず組織を取って、どんなタイプの乳がんか確認します。術前検査で、大きさ1.5センチ以下でリンパ節などに転移のない場合、ラジオ波焼灼療法の適応となります。

ラジオ波熱焼灼療法は入院して全身麻酔で行います。手術と同様に直前にがん細胞が転移しやすいリンパ節を取り、転移がないこと確認し、ラジオ波の針をがん病巣に刺して、焼灼します。焼灼時間は10分弱で、入院期間は乳房温存手術と同様に数日です。

退院後、乳房の放射線治療や抗がん剤治療、ホルモン治療は手術と同じように行います。

乳がんのラジオ波焼灼療法のメリットは、切らないので傷が残らず、乳房の変形が少ないことです。痛みが少なく、体の負担が少ないのもメリットです。

合併症もまれに焼灼部の皮膚のやけど（熱傷）や一過性の硬結ができる程度です。

問題は、乳がんは10年以上の長期成績が大切ですが、それがまだ出ていないことと、1割ぐらいの確率で目に見えないがん細胞が残る可能性があることです。がんの残存は乳房温存手術でも起こりますが、この場合、手術中に確認し、追加で切除し取ります。

乳がんにはラジオ波焼灼療法は承認されましたが、この治療を保険診療で行うにはいくつか条件があり、治療可能な病院や医師はまだ限られています。また、現時点で1・5センチ以下の乳がんの標準治療は乳房温存手術です。

ラジオ波以外にも切らずに、がんを処理する方法があります。1つは肝がんで使われているマイクロ波です。ただ、マイクロ波はラジオ波よりも波長が短く、狭い範囲を短時間で焼くことから合併症が出ることもあります。もう1つは腎がんなどの治療に用いられる凍結療法です。凍結療法は、ラジオ波焼灼療法より痛みが少なく、体内を電流が流れないため、ペースメーカーを付けている人でも治療が受けられます。

この2つ以外にも切らずにがんを治す治療が開発されつつあります。